

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04738

研究課題名（和文）子ども達に苦手をつくらせない教育方法の研究開発-図画工作・美術科教育の質的改革-

研究課題名（英文）The research and development of Educational Methods that do not make Students Weak Consciousness

研究代表者

降旗 孝 (FURIHATA, Takashi)

山形大学・地域教育文化学部・教授

研究者番号：20302284

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）： 研究の成果としては、第1に子供たちの抱く図画工作・美術に対する苦手意識の原因について追及し、その苦手意識を少しでも減少させ解決するような要素を明らかにして具体的な教育方法を研究・開発してきた。第2に、開発した教育方法のいくつかを実際に授業で展開し、授業前と授業後の苦手意識の変容からその教育的効果を実証することができた。第3に、各年次段階の研究結果について、美術教育分野の全国学会の1つである大学美術教育学会の全国大会において毎年口頭発表し、研究成果を公開してきた。第4に、本研究3年間の研究成果を提出する研究成果報告書とは別に、研究集録として総110頁の冊子に印刷してまとめることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義については、学校教育において目指すべき図画工作教育・美術教育の実現のために教育方法の質的改善が不可欠であることを明らかにした。それは美術教育学の理論ではなく、教育実践的な視点において学術的な意義を有するものといえる。

学校の現状を見ると図工・美術が楽しいという生徒が存在する反面、苦手嫌いという子が少なくない。学校の教師もそれを認識しながらも改善しより良い方向に実現できていない。この学校の状況に本研究が寄与することで、社会的な意義が存在すると思われる。研究代表が担当している教師を対象にした教員免許状更新講習において、本研究成果を講習内容に取り入れており受講者に好評を得ている。

研究成果の概要（英文）： As the result of this research, Firstly, we investigated the causes and reasons of students' weak consciousness about art. I have developed a concrete educational method by clarifying the factors that can reduce the weakness even a little and solve it. Secondly, in this study, some of the developed educational methods were actually developed in the lesson, and the educational effect was able to be demonstrated from the change of the weak point consciousness. Thirdly, about the research results of each year, we have made oral presentations every year at the national conference of the University Art Education Society, which is one of the national academic societies in the field of art education, and have published the research results.

Fourth, I was able to print and summarize the research results of the three years in a booklet of 110 pages in addition to the research result report.

研究分野：図画工作・美術教育

キーワード：苦手意識 図画工作教育 美術教育 造形美術教育 教育方法

## 1. 研究開始当初の背景

本研究において研究開始当初においては、当分野の学術的背景として、**Herbert Read**による「美的教育は精神に高貴をもたらす教育であり人間の知性や判断力の基盤となる諸感覚を教育する」(**Education through Art.1956**)や**Viktor Lowenfeld**の「美術は子供の知能と情緒の釣り合いを必ずうまくとらせることができる」(**Creative and Mental Growth .1957**)という造形美術教育が児童・生徒の知識や表現技術の習得だけでなく、バランスのとれた豊かな人間性育成のために重要な役割と教育的意義があることを主張しており、本研究における学術上の理論的基盤となっていた。

しかしながら現実の学校教育現場は、それらの教育理念とは隔たりがあり、誠に残念なことに子ども達に教育的効果を阻害するような苦手意識や不得意感を抱かせてしまっていた。その結果、図工嫌い・美術嫌いの子どもや大人も生まれている。これは教育にとって重要な課題であると考えた。

これらの学術理論の背景と実際の学校教育現場での実態との背景から、本研究の研究課題が生まれしてきた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、学校教育の図画工作科・美術科において子ども達に苦手をつくらせない教育方法とはいかなるものか探求し、そのための具体的な指導法を研究・開発することである。

社会一般的に図画工作・美術の教科は、うまく上手な作品作りの教科というイメージが強く、図工や美術に対して苦手意識を抱いている子供や大人は少なくない。実態調査の結果からも研究代表が担当する教員養成課程の大学生や教員免許更新講習を受講するベテランの学校現場の教師でさえも少なからず苦手意識を持っていた。

本来この教科は、上手な作品作りの得意な子のためのもではなく、全ての子ども達にとって有意義な教育活動であるべきと考えている。子供のバランスのとれた豊かな人間性育成を目指し、苦手意識を抱く原因と理由とを追求し、それを根本から解決し、それをつくらせないような有効な教育方法を具現化することで、我が国の造形美術教育が質的に改革されることを目指した。

## 3. 研究の方法

平成26年度から平成28年度の科研補助金で実施してきた先行研究の成果において、子ども達の苦手意識を減少させる5つの要素を明らかにしてきた。その要素をもとに、平成29年度から令和元年度の3年間において、その具体的な教育方法を研究し開発してきた。これを実際の大学講義の中に取り入れて苦手意識の変容からその教育的効果を検証してきた。その検証結果から苦手意識をつくらせない具体的な8つの教育方法を明らかにしようと取り組んできた。

### (1) 教育方法 - 子供たちの実態・現状の把握 -

教育方法の第1は、授業を実施する前段階として、目の前の子供たちの実態把握の必要があると考えた。子供たちが、どのような学習経験を積み、どのような教科イメージを持っているのか生徒のレディネスを事前に把握することが必要と考える。これについては、4月最初の授業初日に、話し合いやアンケートをもって把握してきた。この実態・現状把握を通して、子供たちが抱いている苦手意識の存在も確認することができると考えて取り入れてきた。

### (2) 教育方法 - 教科の目的の明確化

教育方法の第2は、図工・美術教育の目的を明らかにし、教科イメージをより良くする必要があると考えた。それは、実態調査の結果から抱いている教科イメージには、大きな格差があることがわかってきたからである。図工・美術教育の目的は、うまく上手な作品を描き作ることでありという意識がかなり強固に持っている者もいて美術への苦手意識も少なくなかった。そこで、図画工作・美術では何を大切にしているのか、教科の目的を明確にするために図工・美術の教科は、単に作品作りが目的ではないこと、表現過程にこそ教育的意義があることを授業で、特に強調する必要があると考えて取り入れてきた。

### (3) 教育方法 - 教科書を通して図画工作・美術教育の歴史

現行の教科書と共に古い教科書を重要な資料として活用することで、我が国の美術教育の歴史を辿ることができる。明治5年の学制から現在に至るまでの美術教育の歴史の概要を解説して、その経緯を理解させると共に、教科のねらいや目的的理解へも繋げることが可能になると考えて教育方法の1つとして取り入れてきた。

### (4) 教育方法 - 材料体験からの題材研究

教育方法の第3は、実際に材料にふれものを描いたり作ったりする題材研究がある。ここでは、表現の楽しさや魅力について実際に体験してもらうことが重要であると考えて取り入れた。

低学年題材 「新聞でへんし〜ん」表現活動 「しんぶんビリビリ」

低学年対象の新聞紙の身近材を使った題材研究に取り組んだ。最初から作品づくりに臨むのではなく、最初にちぎったり、まるめたり、筒にしたりという材料体験を十分させる。新聞紙という材料に十分触れさせる経験となる。作品づくりでない材料体験が重要となった。十分な材料体験の後に、低学年対象題材の「しんぶんて変身」の題材研究を実施した。

中学年題材 「粘土であらわそう」表現活動 「粘土ゲーム」  
表現活動 「マイ粘土ペラ作り」

次に、中学年対象の粘土を使った立体表現の題材研究に取り組んだ。ここでも最初から作品作りに入るのではなく、最初粘土あそびゲームの表現体験を取り入れて、十分に粘土の材料になじませた。ゲームの要素に教養的な要素も入れることで、新たな気づきや発見をも含まれた学習経験とすることができると考えた。それらの学習経験を生かして、粘土を使った立体表現題材に取り組ませた。令和元年度には、題材として「不思議な宇宙人」「面白生き物」「住んでみたいおうち」「未来のまち」など様々なアイデアが出てきた。グループ単位で選択して表現に取り組んだ。粘土を使った題材では、粘土の可塑性を生かして様々な題材を設定し取り組むことができる。また「マイ粘土ペラを作ろう」の学習経験も取り入れている。割り箸を材料にして簡単な切り出し類のカッターナイフを使って削って、自分だけの粘土用ペラを作るのである。この学習経験を通して刃物道具であるカッターナイフの扱いに慣れてもらうという教育的意味も込められていた。

低・中学年題材 特別講義「クレヨンであそぼう」

- ・表現活動 クレヨンでいろいろ ・表現活動 「みんなで連画」
- ・表現活動 「不思議な見えない魚たち」・表現活動 「みんなでカラフル迷路」

教育方法 では、最初に作品例を見せるのではなく、まず十分な材料体験をさせることが重要である。この材料体験の量と質によって、その後の個々の表現活動の広がりが変わってくると考えて取り組んできた。

(5) 教育方法 - 基礎的な知識・技能

教育方法の第 1 は、自分らしい表現を目指させるためにも、道具の扱いや表現技法の基礎的な知識や技能が不可欠であると考えた。自分らしい表現を実現するためには、それを支える知識や技能が求められるからである。特に、絵画題材に関連してパレットや水入れなどの基本的な用具の扱い方や混色の仕方・筆のタッチなども、併行して扱う必要性を痛感している。

中学年題材「絵の具を楽しもう」

- ・表現活動 「3色であじさい多彩」 ・表現活動 「オノマトペでいろいろ」

(6) 教育方法 - 絵画題材による表現活動 -

教育方法の第 6 は、絵画題材による表現活動での取り組みと考えると取り入れた。苦手意識の対象が、工作表現よりも圧倒的に絵画表現であったからである。絵画表現を通じて、苦手意識を少しでも減らし払拭させる必要があると考えた。そこで、偶然にできるモダンテクニックではなく、表現対象を明確にした絵画題材研究を講義内容に取り入れている。講義の最初に、なぜ絵に表すのかという根本的な問いを学生達にする。そして、題材研究として「本当に描きたい絵」というテーマで取り組ませる。

高学年題材「本当に描きたい絵」

絵画題材において特に重視したのが、なぜその絵を描きたいと思ったのか、本人自身の抱くイメージやその思いをまず明確にすることである。学習プリントに記入し、毎回授業の最初にそれを一人一人確認して表現に取りかからせることにした。重要な教育方法と考えた。題材研究のまとめで行った鑑賞会の場面では、絵の表現は写真の再現ではなく実際の写真よりも作者の思いが伝わるという素晴らしい側面があることを事例によって理解させることができた。

高学年題材 「目に見えないものを描く」・表現活動 ハイパーライドティッシュ法

目に見えないものを描く学習経験を体験することで、とかく目に見えるもの実際にあるものをそれらしく忠実に描くことを規範への意識改革を促す貴重なきっかけになると考えた。

中学年題材「4倍になる絵」

クレヨンでの様々な表現体験を受けて色と線での表現から自分自身の表現へと繋げるために両面カーボン紙を使った「4倍になる絵」の題材に取り組んだ。鉛筆で描いた絵があつという間に4倍の絵になるという魔法のような工夫を取り入れた。この工夫は、効果的で夢中になって表現活動に入ることができた。今まで苦手意識を持っていた学生たちにも絵を描く抵抗も少なく楽しく取り組める教育方法の1つになった。

#### (7) 教育方法 - 認め合う学習の場（鑑賞）を設定

教育方法の第 1 は、それぞれの表現を認め合える学習の場を意図的に設定することが必要と考えた。学習の場とは、題材による表現途中の段階や最終段階の鑑賞学習場面などである。

図画工作・美術では作品が完成したらゴールではなく、個々の表現をお互いに認め合える鑑賞学習が、不可欠であると言えた。お互いに表現の良さや工夫について認め合い、それが、新しい発見や自分の表現へのヒントに繋がることになる。今まで、自分の表現に自信がなかった場合でも他者が認めることで、自分でも自覚しなかった良さに気づくことも十分ありえると考えた。

#### (8) 教育方法 - 学習空間の質を改善

教育方法の第 2 は、認め合える学習の場と密接に関連する学習空間の質の問題がある。一人一人のそれぞれの表現の良さや工夫を相互に認め合えるだけでなく、お互いに発想を促し合ったりするような学習空間が求められる。これは、本研究における研究成果の中でも特に強調すべき事項になった。しかしながら、容易にできるものではなく日々の積み重ねによって出来ていくものであり、教師自身の意識改革と共に学級経営の在り方とも密接に関連している重要事項と考える。

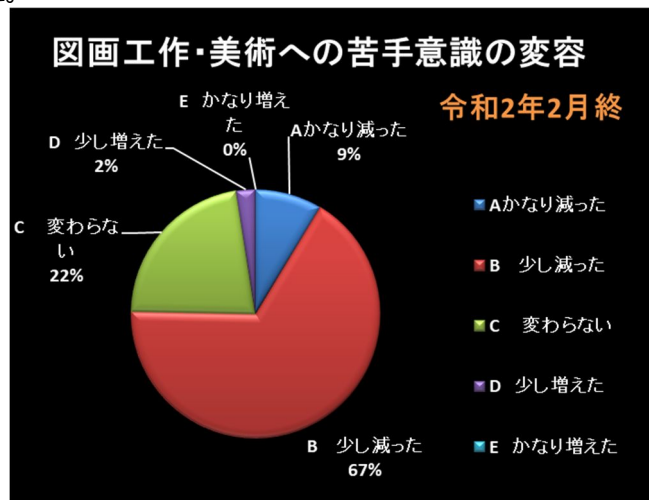
### 4. 研究成果

研究成果としては、教育法 1 から教育法 2 を平成 31 年度・令和元年度の教員養成課程の必修講義に取り入れてきたことで、4 月当初の学生の苦手意識がどのように変容したのか、令和 2 年 2 月末の最終講義において再度調査を実施した。

苦手意識がかなり減ったと応えた学生は、7 名で 9% いた。少し減ったという学生は 54 名で 67% だった。合わせると 76% 約 8 割弱の学生の苦手意識を減らすことができた。

この結果で興味深いのは、4 月当初苦手意識があまりないと応えた学生も減ったという者が少なかったことである。変わらないという学生は 18 名の 22% であった。この中には、もともと苦手意識はなかったので変わらないという学生も 12 名いるがどうしても友達と比較してしまい苦手は変わらないという学生もいた。

かなり苦手意識が増えた学生は 0 名だった。



【図 25：1 年後の苦手意識の変容】

この最終調査では、その苦手意識が変化した理由についても、影響があった順に第 1 位から第 5 位まで 5 つあげさせている。1 番影響があった理由は、合計 195P で「上手、下手で評価されないとわかったから」で、第 1 位の理由としてあげた学生は 30 名いた。2 位でも 9 名いた。これは、苦手をつくらせない教育方法において重要な結果である。

2 番目に影響があった理由は、合計 127P で「自由にできたから」であった。第 1 位の理由にあげた学生は 13 名、第 2 位は 14 名だった。これは学習空間の雰囲気や環境も含めて、一人一人が自由に表現に取り組めることが重要といえる。

3 番目に影響があった理由は、合計 112P で「自分らしい表現が大切とわかったから」であった。第 1 位の理由にあげた学生は 12 名、第 2 位は 13 名だった。1 番の理由とも合わせて、うまさではなく自分らしい個性のある表現を求めたことが影響していた。教育方法に反映すべき結果である。

4 番目に影響があった理由は、合計 108P で「楽しく表現できたから」であった。これは、研究当初にはそれほど重要ではなく前提ともいえる常識と考えていたが、調査結果を見てあらためて造形美術表現に内包する根源的な魅力について再確認することになった。図工・美術への苦手をつくらせないためにも造形表現の楽しさについては、子供たちにも味合わせなければならないと強く確信することになった。

5 番目に影響があった理由は、合計 40P で「鑑賞の時間にそれぞれの作品を見てその良さを知ることができたから」であった。これを理由に書いた学生はそれほど多くはないが、1 位から 5 位までどこかに書かれていることは無視できない教育方法の 1 つとしてあげられるかもしれない。

この調査結果は、自己分析して自身における苦手意識の変容について特に影響があったとあげた

理由たちである。これは、教育方法として から まで講義の中で実証してきた教育的効果の結果としてとらえることができる。

この調査では、これから小学校教師になったら、児童に図工が好きになってもらい苦手意識をつくらせないためには、具体的にどうしたら良いと思うのかという質問もしている。

1番多かったのが、「上手下手ではないことを伝える」が31名であった。2番目に多かったのが、「一人一人の思いやアイデアを大切にすること」で30名書いている。3番目に多かったのが、「自由にさせること」で27名が書いている。他には、「過程を重視すること」が15名、「自分らしさを表現させること」も13名書いており、2番目の理由とも合わせて大事なことといえる。

他には、「褒めてあげる」と書いた学生が18名いて、今回実際に題材研究をしながら教師や友人たちから褒めてもらったことが教育的に有効であったことを実感した結果になっていた。また、「比較しないこと」が11名で、「批判しないこと」も3名が書いており、今までの自分が受けてきた経験をも思い出しながら、今回の大学での講義経験から、小学校教師のあるべき姿を正直に述べていると感じた。これから我が国の図画工作教育の質的改善に繋がると実感することができた。

本研究では、多くの人が抱いてしまっている図工・美術への苦手意識という否定的要素にあえて光を当てて取り組んできた。特に、これから小学校の教師になろうとしている学生たちに図工・美術への苦手意識を抱いたまま学校現場に送り出すことは、重要な問題であると考えた。

平成26年度から28年度における第1期の研究スタートから、学生が抱いていた図工・美術への苦手意識がどのような理由と原因によって生まれたのか明らかにできた。また、そこから苦手をつくらせない要素や教育コンテンツも明らかにすることができた。継続研究として平成29年度から令和元年度の第 期までの研究によって、実際に授業の中に教育コンテンツを取り入れながら教育方法として研究・開発してきた。

本研究成果としては、4月当初学生たちが抱いていた図工・美術への苦手意識は、今までの研究成果を意図的に取り入れた教育の実施によって、約8割の学生の苦手意識そのものを大幅に減少させることができた。また、今まで苦手意識がなかった学生の意識をも変えることができた。

しかしながら、課題としては全ての学生の抱いていた苦手意識を完全には払拭することができなかったことである。数名の学生の中には、それでも苦手意識はなくなる。「どうしても自分と他の人と比べてしまう」というケースやどうしてもうまく上手に作品を描いたりすることにこだわる場合であった。その学生は苦手意識が骨の髄までしみ込んでいるかのように、うまい上手という尺度や価値観を捨てきれないでいた。やはり、20年間の長きにわたって植え付けられた図工・美術のイメージや教育規範は、払拭することが容易でないことがわかった。

それだけに、義務教育段階のまだ発達段階の低い児童・生徒における図画工作・美術科の教育の在り方の重要性を確認することができた。特に、小学校の中学年頃から客観的に視覚認知することができはじめ、物事を比較する能力も飛躍的に伸びる。そこでは、必然的に他の人の表現と自分自身の表現とを比較し、その相違を自覚する時期でもある。その時期に、単純にうまいとか上手という狭い価値判断で表現を見るのではなく、多様な表現も認め合い理解できる教育を意図的に取り入れることで、その時期に芽生え始める苦手意識の芽を摘むことができると考える。

苦手意識をつくらせない教育について研究を重ねる毎に結果的には、当初苦手意識というマイナス要因を少しでもなくしていくという対処療法的な方策を考察してきたが、最終的には図画工作・美術教育で最も大切にすべき一人ひとりの児童・生徒の表現を大事にしてそれを認め合えることが実現することこそが、子ども達の苦手意識をつくらせない教育であると考えようになった。

最終的には、目指すべき造形美術教育を実現することこそが、結果的に図工・美術への苦手意識そのものが生まれにくいことだと考えるようになった。

その逆に、図工・美術への苦手意識をつくらせないような教育を行うことが、最終的には目指すべき造形美術教育の実現に他ならないという結論に到達できた。

このことが、現在の学校教育における図画工作科教育・美術科教育の質的改善に繋がるという研究成果になった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 降旗 孝	4. 巻 第52号
2. 論文標題 山形県長瀬校における「想画教育」の再考-現在の長瀬小学校教育への継承-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学美術教育学会「美術教育学研究」	6. 最初と最後の頁 329 - 336
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN2433-2038	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 降旗 孝、高嶋裕也、芦野繁樹	4. 巻 令和元年度
2. 論文標題 図画工作・美術における主体的・対話的で深い学びの実践研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 令和元年度大学と附属学校園との共同研究	6. 最初と最後の頁 37-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 降旗 孝	4. 巻 平成29年～令和元年度
2. 論文標題 苦手をつくらせない教育方法の研究・開発-図画工作・美術科教育の質的改善-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 科学研究費補助金研究成果・研究集録	6. 最初と最後の頁 1 - 110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 降旗 孝	4. 巻 第17巻第2号
2. 論文標題 東根長瀬校の「想画教育」についての研究－教育方法及び教科横断的視点からの考察－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山形大学紀要（教育科学）	6. 最初と最後の頁 91 - 104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 降旗 孝、荒垣靖、高嶋裕也他3名	4. 巻 平成30年度
2. 論文標題 図画工作・美術教育において育成すべき資質・能力の研究－第3年次－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 平成30年度大学と附属学校園の共同研究報告書	6. 最初と最後の頁 29 - 43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 降旗 孝	4. 巻 第13号
2. 論文標題 苦手意識を抱かせない教育コンテンツの研究・開発 - 図画工作・美術に対する苦手意識解消の試み -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山形大学教職・教育実践研究	6. 最初と最後の頁 31-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 降旗 孝、荒垣靖、高嶋裕也	4. 巻 平成29年度
2. 論文標題 図画工作・美術教育において育てるべき資質・能力の研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 平成29年度大学と附属学校園の共同研究報告書	6. 最初と最後の頁 34-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 降旗 孝
2. 発表標題 図工・美術への苦手意識をつくらない教育方法の研究-小学校教員養成課程での成果と課題-
3. 学会等名 第58回大学美術教育学会岐阜大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 降旗 孝
2. 発表標題 山形県長瀬校における〔想画教育〕の再考－教科横断型カリキュラムマネジメントの視点から－
3. 学会等名 大学美術教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 降旗 孝
2. 発表標題 苦手意識を抱かせない教育コンテンツの研究 - 図画工作・美術に対する苦手意識解消の試みの成果 -
3. 学会等名 大学美術教育学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 降旗 孝	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開隆堂	5. 総ページ数 3
3. 書名 造形jJOURNAL Vol.63-2 No.434	

1. 著者名 山口喜雄・佐藤昌彦・奥村高明	4. 発行年 2018年
2. 出版社 建帛社	5. 総ページ数 198
3. 書名 小学校図画工作科教育法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----